

日本がん疫学研究会

代表幹事就任ご挨拶

がん疫学研究会の初代の代表幹事は平山雄先生であり、その後を青木國雄先生が引き継がれた。本研究会は厳格な60歳定年制をとっており、平山先生、青木先生と相次いで幹事から特別会員になられました。今迄代表幹事をつとめられた青木先生は、医学部長の重責を負いながら、大規模コホート研究を新たに発足させ、またがんの海外学術調査の責任者としても活躍されました。深く敬意を表したいと思います。平成元年7月から代表幹事を私にやるようにとのお話があり、私は決して適任とは思いませんが、微力ながら一応つとめさせていただくことにいたしました。

本研究会には立派な方々が数多くおられます。特に平山先生、青木先生、また事務局をやっているらっしゃる富永先生には、是非会の発展に大いに尽力頂きたいと考えます。私は幹事の先生方、一般会員の諸先生方と一緒に、会の益々の発展につとめたいと思います。以下若干私なりの意見を書かせて頂きます。

ご承知のように、本会が順調に発展していることはご同慶にたえません。私が九大医学部公衆衛生学教室に入って間もない昭和30年代にあっては、日本のがんの疫学者といえば瀬木、平山両先生のほか、10~20名足らずでした。以来今日迄多くの方々がこの分野に入られ、大きな勢力となりました。私は日本衛生学会のワークショップ開催に若干関係して参りましたが、幸い今日迄疫学関係のワークショップが毎年認められている事は(テーマは変わりますが)、疫学的重要性と研究者の層の厚さを認めて頂いての事と考えます。しかし、我々は、将来の益々の発展を考えねばならぬのも事実であります。

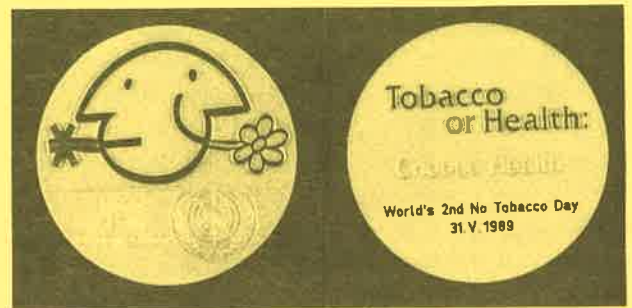
たまたま私は昨年夏、Harvard大学公衆衛生学疫学教室のMacMahon教授に招かれ、数ヶ月間訪問教授としてBostonに参りました。ご承知のように、米国には公衆衛生学部という大学院大学があり、疫学教室があります。これはシステムの問題ですが、疫学教室なしに我々が医学部で頑張るのは、相当の努力がいります。また公衆衛生学部にある生物統計学教室は、疫学教室といわば車の両輪をなしており、疫学研究的の推進に大きな力となっています。我が国にも無論国立公衆衛生院がありますが、学位の問題等で苦勞しているらっしゃる点もあり、何とかシステムの上で、公衆衛生学部という大学院大学ができぬものかと思えます。これは或は我々の悲願に終るかも知れませんが。

がんの疫学は、第2次大戦後に英米を中心にして大きな発展をとげました。喫煙と肺がんに関する数多の輝かしい研究が発表され、がん予防への大道を示しました。日本にも平山先生の大規模コホート研究があります。がんの疫学的研究により、肺がんの“Epidemic”大流行には、一部の国では終止符が打たれようとしています。例えば本年春、高松宮妃癌研究基金-I B M国際講演でMacMahon教授が述べたように、英国では全年齢層で肺がん死亡率の減少が著明になったのみならず、若い年齢層、25-34歳の年齢層の肺がん死亡率は、肺がん大流行の前

WHOからのメダル授与に寄せて

小生は1989年5月31日の第2回世界禁煙デーに、はからずもWHOから喫煙対策に貢献したとしてメダルと証書を授与されました。授与の理由は明らかではありませんが、多分1987年11月に東京で開催された第6回喫煙と健康世界会議の事務総長を務めたことが一因ではなからうかと思っています。今回はアメリカの公衆衛生総監のDr. Koop、サウジアラビア航空など、6個人・団体にメダルが授与されたとのことでした。しかし、わが国の喫煙対策はまだ遅れており、このような現状でWHOから喫煙対策に貢献したとしてメダルをいただくのは名誉というよりむしろ恥であり、今後とも「健康な無煙社会」をめざして一層喫煙対策に努力しなければいけないと思っています。

(富永 祐民)



表

裏

の時代に迄低下したという事です。我国でも一層の喫煙対策の進展により、肺がんの大流行をくい止める必要があります。この事は、がんの疫学者は研究の外に、実際の予防活動にも大いにかかわる必要性を示します。

喫煙はがんの原因の塊を占めるといいますが、喫煙の問題が一応学問的には決着がみられた今日、がんの原因の塊を占めるといふ食生活の問題が重要であります。この方面には多くの研究がなされたにもかかわらず、万人の首肯しうる輝かしい結果が得られたとはいえないのです。その原因として、食生活の複雑さと、その把握の困難性があります。画期的な成果、breakthroughは、一にかかって食生活的的確な把握ができるかどうかによるといえましょう。食生活とがんに関する研究では、得ている情報の信頼性がどれ位あるのか、それをまず把握する必要があります。

最後にあたりまえのことですが、がんの疫学はがんの原因究明のためだけのものではありません。今日特に種々のがんのスクリーニングの評価に、疫学は大きな貢献をしております。一方疫学者のみならず、関連領域の方々との連携プレイ、専門領域内の、境界領域の研究も重要であります。会員諸先生と共に、本研究会の会員間の融和と、益々の発展を願いたいと存じます。

廣畑 富雄(九州大学医学部公衆衛生)

第12回日本がん疫学研究会を開催して

「がんとライフスタイル；がん予防への道」というテーマで、第12回の日本がん疫学研究会を、九州大学医学部キャンパス内の九大同窓会館で平成元年6月17日（土曜日）に開催した。参加者は123人（会員68人、非会員55人）に達した。当日9時半から4時40分まで、一般発表が20題、特別発表が5題あり、非常に充実した研究会であったと考える。主題が「がんとライフスタイル」という、多くの人々が関心を持つテーマであったためか、がん疫学研究会の会員の外に、かなり外部の人達の参加もみられた。

本研究会で私が苦心をしたのは、いわば目玉として考えた特別発表である。がんとライフスタイルについてずいぶん多くの研究が今日迄なされてきた。現時点で交通整理をし、我々はどこ迄確信をもってがんとライフスタイルの関係についていえるのかを考えようとした。研究成果の中で、一部研究者により報告はされていても、全体として評価した時に、未だ解決のついていない問題として処理すべきなのか、或は確信をもっていえるのか、そういう点を含めて日本の主要部位のがんについて検討してみたいと考えた。

現在、肝がんが急激に増加してきている。特に男に増加してきているのが特徴的であるが、これに関して日山先生に「肝がんと日常生活習慣」という題で発表していただいた。大阪府立成人病センターを中心とした一連の研究をきれいにまとめ、参加者に感銘を与える発表であった。胃がんについては、かねてより「胃がんとライフスタイル」という題で私と共に研究を進めてきている福岡大学古野助教教授に総説を発表してもらった。胃がんに関する多くの研究にcriticalな評価を行ない、それは我々自身の研究に対してもそうであるが、胃がんのリスク要因として何がはっきりいえるのか、一応の指針を示し得たものとする。平山先生は、全国29保健所管内の40歳以上成人約26万5千人を対象に、長年月の追跡研究を行なわれたのはよく知られている。今回はそれを集大成し、「大規模コホート研究にもとづく部位別にみたがんとライフスタイルとの関係」という題で発表された。こういう総合的に解析結果を示されたのは、今回が初めてであり、貴重な研究成果である。一方、この研究が集結した後に、新たな大規模コホート研究が名古屋大学青木先生を中心に企画され、着々と実行されている。これには全国の疫学者が協力していることはいうまでもない。本研究では血清バンクの作成が特に注目され、疫学者のみならず多くの臨床家、他分野のがん研究者の人々にとり、貴重な財産となろう。青木先生は「大規模集団のコホート研究による発がん要因の評価に関する研究」と題し、本研究の概要を述べた。

以上はがんの原因に関する特別発表であるが、実際にがんの予防につき活発な活動を行なっている大阪がん予防検診センターの大島先生に、「ライフスタイルとがん予防活動」という演題で講演をいただいた。がん予防活動にはそれなりのノウハウが必要である。種々苦心をこらしたノウハウが紹介され、我々に有益な情報であったが、特に予防活動第一線で働いている衛生行政関係者にとっては、非常に重要な示唆を与えられたと思う。

一般発表20題についてはあらためてご紹介するまでもなくすでに本研究会会員にお送りしている抄録を読んでいただきたい。

一応タイトルのみを記しておく、

1. 東北・北陸地方の県別食塩摂取量と胃癌死亡率について 小松正子
2. 新潟県のがん死亡とライフスタイル（胃がんを中心として） 渡辺 宏
3. 胃粘膜病変の指標としての尿中過酸化脂質量の意義 高橋道人
4. 病院疫学研究：乳がんと子宮頸部がんの比較症例・対照研究 田島和雄
5. 乳癌、乳腺症と食生活、飲酒、喫煙 菊池正悟
6. 小児がんと妊娠前・妊娠中の環境要因 谷村雅子
7. ライフスタイルの家族内伝播とがんの家族集積性 山口直人
8. 健康スクリーニング調査からみたライフスタイルと血液分析データとの関連 -長野県厚生連健康スクリーニング調査結果より- 大野ゆう子
9. 心理社会的ストレスとがん 小川 浩
10. 我が国のがん対策の総合評価「試案」 岡本直幸
11. がん研究における食事調査法の検討 古野純典
12. 北海道第1次産業地域における追跡調査研究 森 満
13. 岩手および沖縄県地域住民の血清生化学データとライフスタイル -がん死亡率の地域較差に対する生態学的アプローチ- 津金昌一郎
14. 肝硬変から肝がんへのプロセスにおける飲酒・喫煙の影響 稲葉 裕
15. 肝がん・肝硬変とライフスタイルに関する患者対照研究 田中恵太郎
16. 韓国と西日本におけるHBV関連肝臓疾患の比較検討 原武諷二
17. 喫煙の長期健康リスクの推定 -健康教育への応用- 中村正和
18. 女性非喫煙者における受動喫煙および室内空気汚染と肺がん罹患との関係 -多施設共同症例対照研究の結果- 祖父江友孝
19. 熊本県下における大腸癌の実態調査 藤好建史
20. 膵がんの疫学的研究 -ケース・コントロール研究による関連要因の検索- 後藤良一

本疫学研究会が終了した後、多くの方は医学部キャンパス内にある太閤秀吉遠征時の利休釜掛けの松を見に行かれた。これは当時この一帯には松林が連なり、野外の茶会が開かれた時の記念である。研究会の後の懇親会は、近く中華料理店で立食形式で行ない、44人の参加を得て盛会であった。全体として、天候にも恵まれ貴重な種々の研究発表があり、非常に有意義な会であったと考える。なおその前日に、厚生省がん研究助成金による「発がんと生活環境要因に関する分析疫学的研究」の班会議が福岡で開催されている。また本研究会の内容は、「癌の臨床」の特集号、臨時増刊号として出版される予定である。終りにあたり諸先生方のご協力により、有意義な研究会をもてたことを感謝します。

1989年度日本がん疫学研究会議事録要旨

日時：1989年6月16日(金) 6:00-8:00p.m.

場所：福岡リーセントホテル(福岡)

出席者：幹事：三宅、中村、笹波、稲葉、渡辺 昌、清水、青木、富永、小川、田島、
渡辺 能(川井代)、大島、花井、日山、森本、廣畑、吉村、福田、徳留
監事：井上、 特別会員：平山、渡辺 宏、加美山、重松 峻

1. 庶務報告

富永庶務担当幹事から会員数等および研究会記録発刊状況について報告があった。

(参考1) (1989年6月1日現在)

会員数： 241名、幹事数： 28名、監事数： 2名
特別会員数： 7名、顧問会員数： 4名、賛助会員数： 0名

(参考2) 第11回日本がん疫学研究会(東京)の記録集は篠原出版から癌の臨床vol.35(No.2)に特集「がん対策において疫学は何かできるか」として発刊された。

2. ニュースレターの発刊

佐々木ニュース編集担当の代理として富永幹事からNEWS CASTの発刊状況について報告があった。すなわち、過去1年間にNo.14からNo.17の4号が発刊された。

今後にも4回のペースで発刊したいが編集作業量が多く、他の幹事に編集を手伝ってほしいとの要請があった。そのため、小川幹事がニュースレターの編集を手伝うことになった。

3. ワークショップの開催

小川、星両幹事が世話人となり、昭和63年12月18日に東京(国際研究交流会館)で開催された第3回ワークショップ 主題「喫煙対策」についての報告があった。なお、このワークショップの報告は公衆衛生53(6):404-9、1989に掲載された。

討議の結果、今年度は「ウィルスとがん」を主題としたワークショップを開催することとし、渡辺 昌、田島、徳留の3幹事に世話人を依頼し、具体化することになった。

4. 会計報告

富永幹事から昭和63年度の会計収支についての報告および平成元年度の予算案が示され承認された。次年度への繰越金が減少傾向にあるが、今年度もワークショップを開催する。収入を増加する方法についても検討する。

5. 役員等の一部改選

- 1)1989年6月30日で任期が切れ、1989年7月1日で満60才に達している青木代表幹事から幹事辞任の申し出があり、特別会員に推薦した。
- 2)青木代表幹事の後任として幹事の互選により廣畑幹事が代表幹事に選出された。
- 3)1989年6月30日で任期が切れる他の幹事、監事は全員任期を更新することとした。
- 4)新幹事として廣田良夫(九州大学医学部公衆衛生学講座)を推薦することとした。
- 5)顧問会員として次の4氏を推薦し代表幹事が顧問就任を要請することになった。

杉村 隆 国立がんセンター総長
Brian E. Henderson 南カリフォルニア大学がんセンター所長
Robert W. Miller NCI臨床疫学部長
Hiroshi Nakajima WHO総長

6. 次年度および次々年度の研究会の開催

次年度の第13回日本がん疫学研究会は、札幌医科大学公衆衛生学の三宅浩次教授に会長を依頼して、札幌で開催することが昨年の幹事会で内定していたので、今回の幹事会で確認が行われた(主題、開催時期等は未定)。次々年度の第14回日本がん疫学研究会は順天堂大学医学部衛生学の稲葉裕教授に会長をお願いし、東京で開催することとなった。

7. その他

青木代表幹事から国際疫学学会(IEA)の国内窓口として、日本疫学学会を設立する件についての経緯、今後の予定についての報告があった。すなわ

ち、1991年1月に日本でIEAのアジア地区でのRegional meetingを開催し、その際に日本疫学学会を発足させ、その後2年に1回のペースで英語の会議を開催する予定であるとの報告があった。今後これらの点について関係者と交渉、打合せを行うことになった。

日本がん疫学研究会幹事・監事・特別会員・顧問会員

(1989年7月1日現在)

1) 幹事

三宅 浩次*	札幌医科大学公衆衛生学教室
久道 茂*	東北大学医学部公衆衛生学教室
柳川 洋*	自治医科大学公衆衛生学教室
中村 健一*	防衛医科大学校公衆衛生学教室
笹波 隆文*	埼玉県立がんセンター研究所疫学部
村田 紀*	千葉県がんセンター研究局疫学研究部
稲葉 裕*	順天堂大学医学部衛生学教室
渡辺 昌*	国立がんセンター研究所疫学部
星 旦二*	国立公衆衛生院衛生行政学部
箕輪 眞澄*	国立公衆衛生院疫学部
坂元 吾偉*	(財)癌研究会癌研究所病理部
清水 弘之*	岐阜大学医学部公衆衛生学教室
大野 良之*	名古屋市立大学医学部公衆衛生学教室
富永 祐民*	愛知県がんセンター研究所疫学部
小川 浩*	愛知県がんセンター研究所疫学部
田島 和雄*	愛知県がんセンター研究所疫学部
川井 啓市*	京都府立医科大学公衆衛生学教室
大島 明*	(財)大阪がん予防検診センター検診第1部・調査部
花井 彩*	大阪府立成人病センター調査部
日山 與彦*	大阪府立成人病センター研究所第10部
森本 兼豊*	大阪大学医学部環境医学教室
馬淵 清彦*	(財)放射線影響研究所病理疫学部
廣畑 富雄*	九州大学医学部公衆衛生学講座
廣田 良夫*	九州大学医学部公衆衛生学講座
吉村 健清*	産業医科大学臨床疫学教室
大久保利晃*	産業医科大学環境疫学研究室
福田 勝洋*	久留米大学医学部公衆衛生学教室
徳留 信寛*	佐賀医科大学地域保健科学教室

2) 監事

井上 怜子* 神奈川県立がんセンター企画調査室
佐々木隆一郎* 名古屋大学医学部予防医学教室

3) 特別会員

平山 雄 予防がん学研究所
栗原 登 宮城県新生物レジストリー
渡辺 宏 予防がん学研究所新潟
藤本 伊三郎 大阪府立成人病センター調査部
加美山茂利 秋田大学医学部衛生学教室
加藤 寛夫 (財)放射線影響研究所疫学部
重松 峻夫 福岡大学医学部公衆衛生学教室
青木 國雄 名古屋大学医学部予防医学教室

4) 顧問会員

倉恒 匡徳 中村学園大学長
重松 逸造 放射線影響研究所理事長
菅野 晴夫 癌研究所長
山本 俊一 聖路加看護大学
杉村 隆 国立がんセンター総長
Brian E. Henderson 南カリフォルニア大学がんセンター総長
Robert W. Miller 〃 NCI臨床疫学部長
Hiroshi Nakajima 〃 WHO総長
*顧問会員就任を要請中

*の幹事・監事の任期：1988年7月1日～1990年6月30日

**の幹事・監事の任期：1989年7月1日～1991年6月30日

がん疫学関係の国際会議

★ Monbusho International Symposium on comparative
Study on Causation and Prevention of Cancer

November 4-5, 1989, Nagoya
The 2nd Toyota Hall, Nagoya
c/o Dr. K. Aoki, Nagoya Univ.
(Overseas Cancer Researches)

★ Asia-Pacific Cancer Congress (APFOCC)

The 9th meeting
November 23-28, 1989
Lahore, Pakistan
c/o Dr. A. Askari

★ The 7th World Conference on Tobacco & Health

April 1-5, 1990
Perth Western, Australia
c/o Dr. M.M. Daube



★ The 12th IEA Meeting
(International Epidemiological Assoc.)

August 5-9, 1990
Los Angeles, UCLA
c/o Dr. R. Detels

★ The 15th International Cancer Congress
(UICC)

August 16-22, 1990
Hamburg, West Germany
c/o Dr. C.G. Schmidt

編集室から

News Cast も先生方の御協力を得て、第18号を発刊することができました。今号からは、小川浩先生に編集をお手伝いいただくことになりました。益々紙面の充実をはかりたいと考えております。News Castは年間四回以上の発刊を目標に編集を行なっておりますが、会員の先生方の情報交換の場になるように、定期的に発刊するよう心掛けたいと思います。従来所感などに加えて、がん疫学に関する会議情報、最新の研究情報などの情報もお知らせいただければ幸いです。

なお、ワープロにて原稿を作製される場合には、横約11.5cm、縦約30cmの紙面に、24ドット以上のプリンターで作製してください。できあがり約半頁になります。1頁分までは掲載可能と思いますので、どしどし御投稿下さい。

原稿の多寡によって若干変更があるかもしれませんが今年度の発行日程を以下のように予定しております。発行予定の1ヵ月位前までに原稿をお送り下さい。

18号 (本号)	1989年 8月
19号	11月
20号	1990年 2月
21号	5月

新刊紹介

「臨床のための疫学入門」
がん・循環器疾患を中心に

富永祐民、大野良之著
A5判、343頁、定価 4,841円
日本医事新報社

本書は、主に病院勤務の臨床医家向けに、疫学的手法を分かりやすく解説し、各論では「現在の疫病」であるがんと循環器疾患に焦点を合せ、疫学研究野主要成果を紹介したと控え目に序文に書かれている。しかし、日本の疫学をリードするお二人の先生の疫学の定義、臨床への応用など、日頃の疫学に対する考え方が伺われる力作である。